

金型製作のきっかけ

米軍の中型爆撃機B-25が最初に名古屋を空爆したのは、私が生まれる3カ月前の1942（昭和17）年3月だった。航続距離の短い同機は日本から2000キロ程度離れた航空母艦から発艦し、爆撃後は中国に着陸する作戦だった。空母まで戻る燃料が足りないからだ。

その後、サイパン島やマリアナ諸島を制圧した米軍はここを基地として、日本全土の爆撃を開始した。44（昭和19）年12月から翌年4月まで、名古屋に7度にわたる大規模な爆撃を繰り返したのは戦略爆撃機B-29だった。空襲の主目的は東区大幸町にある三菱重工の航空機エンジン工場だ。ある日、陸軍の高射砲弾が命中し、

伊藤製作所社長

伊藤 澄夫 11



漁網機械の舟型
(シャトル)

1機のB-29が昭和区御器所に墜落していた。航空機部品の製作に従事した。近くの工場で勤務していた父は急いで現場に駆けつけた。残骸を見るとなんと多くの部品が金型によって作ら

B-29の部品に衝撃

程度で出来るだろう。この戦争は絶対

に勝てない」と回顧していた。大手魚網製造会社の機械の修理を任せられ、技術者だった父は「いずれ独立し金型を作りた」とこの時、決意したのだ。5カ月後に終戦となり、わずかな資金で魚網機械の消耗部品であるシャトルの生産を開始し、戦後復興のスタートを切った。

四日市は塩浜に海軍燃料所があった関係で2度の空襲を受け、市内の90%以上が焼け野原となった。地場産業の一つである製網会社も大きな被害を受

けた。魚網機械の修復には当社のシャトルが必要で、どれだけ生産しても追いつかない状況が10年も続いた。60年代に入り町工場として形が整ってきたころ、父は戦時中の決意を思い出した。地場産業である鋳物の金型やプラスチック金型、プレス金型工場を見て回った。その際に松下電器産業（現パナソニック）の協力工場を見学し、目から鱗が落ちたという。「プレス加工すれば製品が下に落ちると思ったが、ガス（スクラップ）が下に落ち、製品が無人で生き物みたいに右側から飛び出して来た。これなら大量生産でき、製品も安くなる。きつとお客もよろこぶぞ」と言い、さまざまな金型の中から順送り金型の製作を決意した。その後、仕事は社員に任せ、頻繁に工作機メーカーに情報を取りに行くようになった。